

まさに「教育」そのもの

学校の医療的ケアを考える⑤

「医療的ケア（医ケア）」という言葉が定着したのは、1990年代の初めころ。「教員が医療行為をするとは何事か」という周囲の批判に対して、肢体不自由な学校の校長会が「治療目的とは異なるため、日常で必要を行なった」として、学校での実施を検討するために新しくつくった概念でした。

県内では少し遅れて90年代後半から医ケアが必要な子どもが増え始め、教員が行うケースも出てきましたが、看護師の配置で一切、手を出せなくなりまりました。

医療のプロである看護師の配置自体は大きな前進だった

猪狩 恵美子さん(63)



いかり・えみこ 1950年生まれ。福岡教育大学教授（障害児教育）。東京都立の特別支援学校で32年間の教員生活を経て、2005年から現職。全国障害児教育研究会会長も務める。

と抱えます。ただ、看護師だけに任せている割に、その数は、途切れなく授業をできるが少なく、東京は各教室に常駐できるほどの十分に配置されていませんが、福岡は一つの学校の小学部から高等部まで1、2人の看護師が走り回るケースが少なくなく、看護師を呼ぶ間は授業が中断してし

ました。最初は「目で教員がおむつを替えるんだ、給食を食べさせるんだ」という時代で。でも、例えばおむつの子がおまるに座れるか、挑戦させるのも教育。体を起き上がらせるか、寝たままリラックスして活動に集中させるのか、目的に応じて姿勢管理を工夫するのも教育です。重い症状の子どもが増えていくのに合わせて、教員の仕事内容が変わっていきました。医ケアもその延長だと抱えます。見かけは重い障害にみえても表現できないだけで実は理解力が高い子がいることは、学校で医ケアをして分かったこと。痰がたまると、体が苦しい場合に能力が発揮できないだけで、医ケアで済まな

れば、いろんなことができるようになる。

今の障害児教育は、責任を気にするあまり、親に負担を委ねすぎていると感じます。教員が参加しても、看護師などの専門職は危機管理の上で重要な役割を果たします。今は普通学校にも、医ケアが必要な子どもが増える可能性がありま。特別支援学校には、医ケア対応の中枢として、正規の看護師配置など、より強固な支援態勢を整えてほしい。

医ケアは子どもの可能性を引き出す手段であり、その担い手が増えれば、子ども自身の世界が広がる。学校の医ケアを充実させることは教育の充実そのものだと思います。

医療的ケア 痰（たん）の吸引や薬を使った栄養注入（経胃栄養）など、日常生活で必要な医療行為。



とまり木 どこに